

創造的な講義を目指して

教育人間科学部 柳沼 宏寿

Aiming for Delivering Creative Lectures

Hirotooshi Yaginuma (Faculty of Education and Human Sciences)

The present article was written to describe how I now organize my lectures upon receiving the Niigata University President's Education Award for 2006. First, I always pay attention to the students' characteristics in organizing my lectures. Then, taking their characteristics into account, I try to motivate them and raise their interest in order to facilitate their acquisition of the specialized knowledge that is desired in university education. For that purpose, each of my lectures are organized paying special attention to the following two points: 1) Promote the bidirectional exchange of ideas by asking students questions and discussing their reports in class and 2) Discuss my own field of specialization from a point of view that is applicable to all fields of study. In my case, I shed light on my specialized field of art education from the point of view of "life theory," and create my lecture content and methodologies accordingly.

Keywords : *creative, bidirectional, life theory, art education*

1 はじめに

大学へ籍を置いて三年。振り返ってみると、日々の講義を創り上げるために苦悩し奔走し続けてきたような気がする。大学という場で、学生に対し何をどの程度までどのように教えればよいのか。私の専門は美術教育だが、専門科目の講義でさえ、こちらが「教えたい」と考える理想と学生の実態のギャップは小さくない。それが小学校免許取得のための「美術科教育法(初等)」や「図画工作」になると、美術とは縁遠い反応を示す学生が多く、全学部対象の教養科目となればなおさらである。彼らにとって真に意味のある大学教育とはどうあればよいのか、自分の研究との狭間で未だつかみきれず右往左往しているのが実情である。

そのような中、この度「学長教育賞」という栄誉を賜った。まず自分が努力してきたことを評価していただいたことは素直にうれしいことであり、心より感謝申し上げたい。しかしながら、自分はその評価にふさわしい実践をしてきたか自問してみると甚だ疑わしいものがある。本褒賞の目的は、選考委員会によれば「表彰を通じて多くの教員の方々に教育事例を知っていただくことで、新潟大学全体の教育レベルの上昇に寄与する」ことにあるという。見渡せば、周りには自分などより遙かに優れた講義をされ、学生からも慕われている先生方がたくさんいる。むしろ、自分はそのような先生方の姿を後追いしてきた方で、本論においても自分の講義について語るなどとは僭上の至りなの

である。ただ、無我夢中で取り組んできたことの中に僅かでも参考になるものがあれば幸いであり、自分自身、今後の講義を創り上げていくための手がかりになるかもしれない。込み上げる畏怖の念に対し、そう言い聞かせながら実践を振り返る次第である。

2 大学教育への挑戦

私は、現職に就く以前は公立中学校の美術教師を務めてきた。したがって大学生の実態や大学教育の在り方について、これまでの立場との比較から感じることが多い。中学校は、勉学以外にも思春期独特の人間関係や進路の問題等々、様々な緊張感で目まぐるしい日常だが、大学では、学生も精神的な安定感を持っており、落ち着いた雰囲気の中で学問を深く掘り下げることのできる環境である。その反面、中学生を扱うのとは違った意味で大きな困難を感じることもある。表面上は大人を装いながら、常識はずれな態度をとる者。例えば、講義中に私語をする。居眠りをする。遅刻しても平然と教室に入ってくる。無断欠席(事後報告もなし)を何とも思っていない等々。二十歳前後にもなってこのような態度をとる姿には正直ショックを受けた。もっとも自分の学生時代を振り返ってみても、程度の差はあれ大学の講義を侮る感覚を抱いていたように記憶する。大学生の象徴的な姿と割り切る必要もあるのだろう。しかしながら、いざ自分が教壇に立ってみると、それらの学生をそのまま放っておくことが、

少なくとも今の自分にはできないことに気づいた。「目の前の学生を何とかしなくてはならない」と思ってしまうのである。これは、自分が義務教育の教員として二十年以上務めて染みついた習性なのだろうか。200名近くの学生に対する講義をどうするか、考えるだけで甚く神経をすり減らされるものがあるが、私は、やはり彼ら全員に対し、この大学にいることに意味を持たせてほしいし、今この講義を共有していることを価値のあるものにしてほしい。そして履修したからには「この講義を受けて良かった」と思わせたい。

私は、どうも自分で自分の首を絞めるような性分なのである。しかし、そのような思いから私の大学教育への挑戦が始まった。

3 二十一世紀の教育の在り方

大学教育のあり方について、「大学全入時代」を控える現在、学生の実態を抜きにして語れないであろう。あらゆる学生を専門的な知の世界に誘い、底上げしていかなければならないということである。自分としては、<知の専門性>と<学生の主体性>をどう両立させるかに課題が集約されるように思っている。そして、その時重要なのは学習者がその専門的内容についてリアリティを伴って理解できるような「知の構造化」であり、同時に、その学びを目指そうとする「前向きな構え」の育成であろう。本論の執筆にあたって、過去三年間の褒賞受賞者の論文を改めて拝読させていただいたが、その課題に対する解答がすでに端的に提示されていた。ここで各論文から共感できたキーワードやセンテンスを紹介したい。

「教員と共に授業を造り上げていく作業に参加できた学生の満足」「学問のわずか一端かも知れないが、それまで触れたことのなかった事を学ぶことのできた学生の喜び」「双方向的」授業への指向」
(第一回褒賞受賞 理学部 渡辺勇一先生)¹⁾

「授業の中の“ライブ”の要素」「学生との共同作業」「技術というより“構え”」
(第二回褒賞受賞 人文学部 松井克浩先生)²⁾

「学生を引き付けられなかったら我々の負け、引き付けられないのは我々に問題があるという考え方」
(第三回褒賞受賞 歯学部 野田忠先生)³⁾

「ソクラテスメソッド」「双方向の講義」
(第三回褒賞受賞 実務法学研究科 山田剛志先生)⁴⁾

それぞれの先生方の実践に共通するのは、やはり「双方向の講義」という視点、つまり、教員と学生のダイアログから共に講義を創造していく営みである。

かつてマゴロウ・マルヤマ (M.Maruyama) が『文化的共生をめざして』(1976年)の中で「教育とはますます、既存の文化的目標をのりこえるための、そして我々の現在の思考や論理や科学や認識論の方式に挑戦するための態度、能力、技能を発展させる問題になるであろう。」と述べていた。⁵⁾ マルヤマは、文化の目標が旧世代から新世代へ伝えられるような静態的パターンから、文化の目標をその文化に属する成員が生み出さなければならないような絶え間なく変化するパターンへの移行をとらえながら教育のパラダイム転換へも言及しているのだが、これらの先生方の実践は、まさに学生の立場へ身を織り込ませ、その中から共に「講義」としての文化を創造している様子が感じられる。これは、私自身も中学校の現場において目標としてきた授業像である。知識を伝授するような静態的な授業よりも、子ども達と共に夢を追いかけてたり一緒に創り上げてきたダイナミックな過程での学びというものは、生涯生き続ける真の学力になりえると感じてきた。それは単に知識というものではなく、生きて働く「知恵」にも近い、いわば認知的方略の形成に関わるものである。ただ、学習者が子どもから大人になるに従い、教授システムは知識伝授型へと収斂されがちである。特に、大学の教養科目のように、受講者の専門が多岐に渡るような講義においては難しい問題であろう。

私は、この難問に対しいくつかの授業方法を試みてきた。その取り組みを以下二つの視点から述べていきたい。一つは教授方法の具体的な工夫点であり、もう一つはその根底にある理念についてである。本論では教養科目の「生命論パラダイムからの美術教育」を中心として、専門科目である「図画工作」「美術科教育法」等の講義も含めて述べていくこととする。

4 講義の創造へ

(1) 講義を組み立てる上での工夫

・講義への所属感を抱かせるために

私は、講義を組み立てる時、主に発問とレポートの利用を中心に据える。

発問については、山田先生が大教室での双方向の講義としてソクラテスメソッドを紹介していたが、私もできるだけ講義に取り入れようと試みている。ただ、問答型で進行していく場合、本質的な質問を準備しないと全体に共有されないし、また、スリリングな展開でないと他の学生が退屈な様子を見せてしまう。中には大勢の前で返答できずに後からレポートで詫びてくる学生もいたりして、内気な学生が多い新潟大学では、こちらの雰囲気作りや演出力が要請されるように感じた。

教養科目「生命論パラダイムからの美術教育」では、受講生が全学部から講義室の席を埋め尽くすほど集まった。私にとっては、多方面の専門分野からの反応

を聞くことができそうで、大変興味深い講義であった。しかし、第一回目の講義で受講した理由を聞いてみると、中にはシラバスも良く読まず「友達が受講していたから一緒にとってみた」「試験がないから」などと答える学生もいた。あまりにも浅薄な姿勢に失望させられるが、これも教養科目の一つの実状であろう。私はたいがいそのような回答に対して「やりがいがあるな」と喜んでみせている。「その安易な選択が、君の生き方を変えるまでの講義にする意欲が湧いてきた」と、現状を受け入れるところから出発するのである。すると不思議と学生側の構えが和らぎ全体の雰囲気もこちらに食いついてくる感じを受ける。最初はその程度のレベルだが、何とか彼らの投げしてきたボールを受け止めるように務めている。ただ、全ての学生に指名が行き渡るようにするのも一苦勞で、名簿にチェックしながら発問をしている。とはいえ形式的な発問と返答を繰り返すだけではない、いわば心のキャッチボールはなかなか難しい。まだまだ力不足で修行を重ねたいと思っている。

また、私は毎回の講義でレポートを課しているが、その中からいくつかの意見を紹介したりその内容を基に講義内容を組み替えたりしている。「同じ年代なのに、そこまで深く考えていることに刺激を受けた」「他学部の人意見を聞いて視野が広がった」などの好反応が多く、前回の意見に対して連鎖的に意見が続くような盛り上がりもあった。他者の考えを聞くことによって自分の位置を確認している様子が伺えて、できるだけそのような機会を多く持つよう配慮している。しかしながら、レポートを読んで適当な意見を抽出する作業はそう簡単ではなかった。特に「生命論パラダイムからの美術教育」では試験を課さない代わりに全回のレポートを評価するという条件であったので、毎週全員のレポートを一枚一枚読んで評価し、出席確認と採点を名簿に記入する作業にかなりの労力と時間を要した。無論、他にもいくつかの講義を並行しているために、教養科目の担当中はまさに膨大なレポートとの格闘であった。

・講義の流れの工夫

私は職業に似合わず人前で緊張する質である。講義に向かう時、武者震いしないまでも「よし、勝負するぞ」と自分に言い聞かせながら研究室を出る。緊張感を解きほぐすために奮起しているにすぎないが、先述した野田先生の言葉にもあったように「学生を引き付けられなかったら我々の負け」である。「勝負」を意識する時、私は頭の中に指導過程の流れをイメージする。講義の落としどころへ向けてどのような戦略で臨めばよいか。特に、重要なポイントとして時間配分があるだろう。他者の講話等を聞くとよくわかるが、同じ90分でも、話し手よりも聞き手の方が遙かに長く感じるし、こちらの滑舌が上り調子の時でも、ふと学生

の表情を見ると疲労感を漂わせていたりもする。学生が興味を持続していけるような指導過程の変化と流れをつくりたいと思っている。話を聞く、活動する（記述・グループ活動・造形活動）、視聴覚教材を鑑賞をする等々、複数の形態の順番や時間配分を調整しながら取り組んでいるが、実際、学生の様子を受け止めながら臨機応変に進めるため、理想の流れが計画通りに進むことは少ない。

・プレゼンテーションの工夫

美術教育は、理論と実践を両輪とする分野である。現場の実践を分析したり、実際に現場へ出向き実践することも必要である。したがって、実践の様子を映像で鑑賞し分析することが、学習効果を挙げると共に、講義の流れに変化としまりをもたらし、自分の場合、現場実践が長かったので過去の記録を編集し紹介することが多い。ただ、記録をそのまま流したのでは焦点がぼけて退屈なものになってしまうため、講義ごとに狙う学びについての絞った編集が重要と考えている。そのことにより、パソコンやビデオなど映像メディアの利用において、編集やプレゼンテーションの効果的な方法についても学ばせることができる。

私は一講義において10～15分程度の映像を利用することが多い。過去の実践ばかりでなく、今の講義で制作している作品や模擬授業などの検証にも有効である。例えば図画工作の講義で、前時に制作した作品の相互評価などでは、絵手紙等の小品を映像に取り込んで大画面に映し出して鑑賞させると、じっくりと作品を読み取ることができて、学生の成就感と造形要素の理解に繋げることができた。

・講義の枠組みを超えた取り組み

私の所属する芸術環境講座では、「うちのDEアート」など、地域と連携したアートプロジェクトを学生主体で推進しており、平成19年度は新潟西区全域へと拡大しつつある。美術教育の立場では近隣の小中学校へ出向き学生やアーティストによるワークショップを演出してきた。その他、独自にも市内小中学校や地域のコミュニティー、児童館等へ出向いての「出前授業」や、毎年浜辺に数万人の市民を集めて開催されている「日本海夕日コンサート」の実行委員に参加しランドアートを企画する等、新潟の地域性を生かしたアートプロジェクトを展開している。これらのプロジェクトは講義とは別に運営されているが、各講義とも臨機応変に関わらせて、開かれた中でのつながりを模索している。

問題は、時程の取り扱いである。一限の講義という枠組みの中で受講生が現場に出向くというのは容易ではない。前後の講義を履修している場合がほとんどで、都合がつかない学生が多い。その中でも事前の調整で、なんとかこなしながら取り組むことができた事例がい

くつかある。例えば、図画工作の講義で市内の小学校での取り組んだ出前授業では、3学年4クラス150名に対し、28名体制で臨んだ。各クラスに7名づつ配置し5～6名のグループに一人の学生が対応した。正規の教育実習とは違った気軽な雰囲気の中で取り組むことができたし、ここで浮き彫りになった課題を次の講義で検証するというサイクルを形成できたことも収穫であった。

(2) 哲学や理念を構築してきた「物語」

こうして、講義を創る上での具体的な方法論を振り返ってみると、いたってあたりまえで初歩的なことしか行っていないし課題が多い取り組みばかりである。しかし、渡辺先生が言うように授業改善の「最大公約数」に集約されていくものなのだと思う。さて、そのような実践を生み出す根幹にあるものへ視線を傾けてみたい。それは、松井先生が言うところの「我々の“構え”」、言い換えれば独自の哲学や理念に関わる問題である。個々の教育者がそのような「構え」を持つに至った経緯を振り返る時、そこにはそれぞれ異なった物語の存在が浮上してくるだろう。

学生によれば、講義で話をしている時、私との距離感が最も近く感じられるのは、私が実際に経験したことや生き方と照らし合わせながら講義をしている時であるという。なぜなのだろう。おそらく、生きる上で様々な喜怒哀楽を伴った出来事というのは、それぞれが自己の歴史的な文脈と重ね合わせながら受け取れることを可能にするからではないだろうか。いわば物語論的な解釈が、感情移入やリアリティのある学びを誘うのではないかと考えられる。自分の生き様をぶつける時、学生のこちらを見る眼差しが変わる。

振り返れば、私の研究は美術教育に関わる仕事が労働としての「ノルマ」とは違った、心をときめかせるものに感じられた頃から始まったように思う。また、自分の二男が低出生体重時（未熟児）で生まれたという出来事も大きな影響をもたらした。予定よりも三ヶ月早く、出産した病院では保育器が不足しており車で1時間以上離れた病院へ搬送された。我が子と離ればなれになった母親やその家族が抱える不安や苦悩は簡単には言い尽くせない。私は、そのような事態を通して、医学の科学的な進歩によって小さく生まれても助かるようになってきた反面、生まれてきた赤ちゃんを守る設備や母親の心のケアといった人間的な眼差しからの医療が立ち後れていることを感じた。これは、医療システムにおいて産科と小児科が独立していることが起因した問題と推察する。（ここで専門以外の分野について語る能力も資格もないので、これは一患者の家族としての感想であることをおことわりしておきたい）このような、出産の前後をつなぐ「周産期医療」については、現在、医学の世界でも見直され改善されてきているが、細分化された知の領域内の研究に比し

て領域間をつなぐ部分が弱いのは教育の世界でも同様である。例えば「総合的な学習」などはその回復を意図したものであったはずだ。自分も当時、美術の授業が閉じられた中で完結するのではなく、開かれた構造において刺激を受け取ったり表現が社会へ向けて発信されるようなつながりを求めているから、様々な分野における問題が一つの理念に収斂されてくる感覚を覚えたのである。

そのように「つながり」という言葉に象徴される生命論パラダイムの自覚が、日常に追われ偏狭になっていった視野を広げ、新たな実践を生み出すきっかけになった。授業の枠組みを超えて、他教科とのつながりから地域や社会的なつながりへと新たな発想が相乗的に湧き出し、原田真二氏や井上堯之氏らをはじめ各界のアーティストとのコラボレーションなどへも発展していったのである。また、「つながり」の時系列としての意味は、子どもが背負う歴史的な文脈へも私の視線を誘った。何をどのように感じるかは、その子ども独自の経験に基づいた資質でもあるわけで、そのような個々の子どもの持つ歴史性、いわば一人一人の「物語」と照らし合わせながら表現を読み取る必要性にも気づかされた。

さて、これらは自分自身の「物語」のほんの一断面にすぎないが、美術教育に対する哲学や理念を構築する礎となってきた。つまり私にとって、美術教育の実践や研究は自分の生き様そのものであり、そこに美術教育の原理が浮上するともいえる。振り返ってみると、学生達は私の問いかけや提言を真摯に受け止め、率直な反応を示してくれた。そして私自身も各専門分野からの様々な反応や未知の情報を得ることができた。本当に多くのことを学生から学んだ。本論ではその内容に触れないが、改めて一人一人の学生に独自の「物語」があることを思い知らされたような気がする。

5 終わりに

大学において求められる学習支援とは、知への探究心に目覚めさせることであり、自分の生き方へ反映させていこうとする前向きな構えを育成することであろう。本来誰もが潜在させているポテンシャルを浮上させること。そのために、全ての学生の資質をあきらめない気持ちで接したい。しかしその「構え」はどのように培われるのだろうか。ある学生は「最初は先生の実践や経験談に触れながら何を求めているのか疑問でしたが、だんだん先生のやりたいことがわかってきた気がします。これは、先生の現代の価値観に対しての戦いの歴史だったんですね」と述べていた。全講義を通して、自分の伝えたいと思うことの何分の一も言い得ていないようで心残りなことが多いが、その「伝えたい気持ち」が伝わるのがまず大切なのだと思う。しかし、あえて言うならば、私は、講義において美術

教育を伝えてきたのではない。学生を巻き込みながら共に講義を創り上げてきたのであり、その講義自体がいわば文化創造への挑戦だったのである。「この授業は今まで自分が感じていた壁をうち壊してくれた」「次の授業を楽しみにしている自分に驚いています」「満足感というか達成感というか、何かこう少し成長した自分がいて、今うれしく思います」「一度はあきらめていたがやっぱり教師になってみたいと思った」このように、講義を通して学生達がそれぞれの立場からパラダイムシフトを構想するきっかけをつかんだり、夢を抱いたりという手応えを感じると、努力が報われるようでうれしい。また、「先生が楽しみながら講義をしているので、私も楽しかったです」という感想もあった。自分の専門を研究するのは楽しいし、その楽しさを学生にも伝えたい。やはり自分が楽しむことが一番なのである。

さて、本論を振り返ると、題目の主旨に迫り得ないことや、大学教育の本質とはずれたことを言っているようで恐縮至極である。そもそも、当初は自分の講義が確立できていない状況であったから「創造」せざるを得なかったにすぎない。ただ、その過程での試行錯誤に彼らの琴線に触れるものがあったのだとすれば、その意味（おそらくは「初心」といえるもの）を忘れずに今後も自分の講義を創造していきたいと思っている。

自分の教育活動は多くの方々に支えられて成り立っ

ている。一緒に講義を創り上げてきた学生の皆さん。拙い自分を本褒賞へ推薦して下さった教育人間科学部芸術環境講座の近藤フヂエ教授はじめ美術科の先生方。そして赴任以来暖かく受け入れて下さった本学部の先生方や職員の方々。さらに本褒賞の運営に関わってご尽力いただいた皆様にこの場を借りて心より御礼を申し上げたい。最後に、共に新潟の地へ来て心の支えとなってくれた自分の家族にも感謝の意を表したい。

註

- 1) 渡辺勇一「授業改善の最大公約数を求めて」『大学教育年報』第9号、新潟大学教育開発研究センター、平成17年3月、p55-61
- 2) 松井克浩「『私』と『社会』のあいだをつなぐ一ひとつのささやかな授業論」『大学教育年報』第10号、新潟大学教育開発研究センター、平成17年3月、p35-40
- 3) 野田忠「教養教育科目『食べる』のやってきたこと」『大学教育年報』第11号、新潟大学教育開発研究センター、平成17年3月、p29-31
- 4) 山田剛志「いかにして会社法のおもしろさを伝えるか」『大学教育年報』第11号、新潟大学教育開発研究センター、平成17年3月、p33-36
- 5) マゴロウ・マルヤマ『文化的共生をめざして』佐藤敬三訳、現代思想1984 vol.12-1